

基本を忘れるということ - ある企業の失敗例 -

神戸大学経済経営研究所
助手 田村 真由美

私が神戸大学経済経営研究所に赴任する前は、ある短期大学で講師をしていた。かなり昔のことである。当時の同僚に、「米国公認会計士の資格を取得したいのだが、どこかよい専門学校はないものだろうか。」と尋ねられた記憶がある。その時、ある専門学校を推薦したのだが、先日ある雑誌にてその専門学校が破綻したという記事を発見した。その記事を発見した時には思わず驚愕してしまった。会計や財務のプロを育成すべき専門学校が、約10億円もの負債を抱えて自己破産申請していたのである。

経営学的に見ると、創業者が経営者として成熟できなかったことが自己破産申請に至る原因であったかもしれない。経営戦略を立案しているのだが、企業の成長とその戦略の方向性が大きく食い違っていたための帰結であるといえるのかもしれない。

しかしながら、会計学的に見るとその原因はいたってシンプルである。当該企業の財務データを会計学的見地から分析してみると、売上高利益率（利益÷売上高）がマイナスの年や数パーセントにも満たない年が多々あったからである。売上高利益率がマイナスであるということや、数パーセントにも満たないということは、財務的に企業経営を行っていくことが非常に難しい状態である。そこで、詳細な収益や費用構造の分析（例えば収益が減少している（同業他社との競争や自社のカリキュラム及びテキストの不備によって受講者数が減少している）や費用が増加している（無駄な広告宣伝費、人件費））を行い、改善策を採らなければ破綻という結末が待ち受けている。

売上高利益率という指標は会計学を学ぶ者にとっては基本中の基本である。会計や財務のプロを育成すべき専門学校が知らないわけがない。しかしながらこの専門学校はこの基本中の基本を忘れてしまっていたのである。それが前代未聞の、会計や財務のプロを育成すべき専門学校の自己破産申請という結末につながったのである。

この記事は当たり前のこと、つまり基本を忘れるということがいかに悲惨な結末を迎えるのかということを知ってくれた。これは、企業というフィールドだけでなく、日々の生活にも当てはまるであろう。人間として、研究者として、教育者として大切な基本を忘れてはいないだろうか。常に自分自身に問いかけて行きたいと思う。